

# 美術館ニュース

no. 183  
2021 1/1

群馬県立近代美術館は、開館以来収集してきた約 2,000点の収蔵品を、保存管理を行いながら、年間を通して様々なテーマでご覧いただけるよう努めています。

当館でしか見ることのできない作品との出会いをお楽しみください。

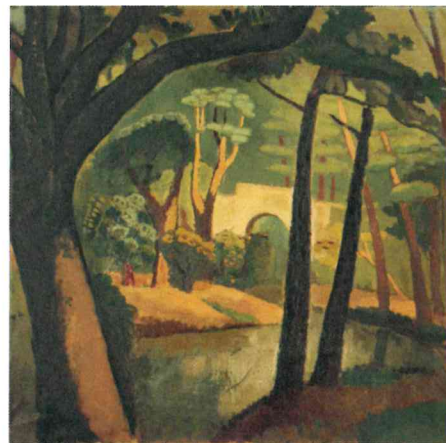
## コレクション展示

### 【展示室 5】 美術の森

2021年1月16日[土] - 4月4日[日]

作家たちは植物からインスピレーションを得て様々な作品を生み出してきました。美しい花はもちろんのこと、緑の葉を茂らせて力強く立つ樹木も数多く作品のモチーフとなっています。庭や公園、街路に植えられた身近な木々は、心に潤いをもたらし、木陰などの憩いの空間をつくりだし、花や果実、紅葉によって姿を変え季節を感じさせてくれます。一方、木々の集合により形成される森は、植物、獣など人間以外の生き物の住処となり、その未知の世界に、古来、人間は畏れや神秘を感じ、森にまつわる信仰、伝説、物語を生み出してきました。

この展示は当館の所蔵作品の中から、木や森をテーマとした作品を特集してご紹介するものです。展示作品は、私たちに比較的身近な自然としての木の表現、そして、幻想や物語の世界にいざなう森の表現、の大きく二つに分けることができます。加えて、木そのものを素材に獣や植物といった木に縁のある自然のモチーフを表現した立体作品も展示します。



正田二郎《M市公園》1931年



福沢一郎《ダンテ暗闇の森へ》1971年

【展示室 2】 日本と西洋の近代美術Ⅳ 1/16～4/4

【展示室 3】 現代の美術Ⅱ

【展示室 4】 『ヨーゼフ・ボイスに捧ぐ』より 1/16～2/21

ドイツの現代美術家、ヨーゼフ・ボイスを讃えて、同時代を生きた30人の作家による作品集を展示します。

福沢一郎の版画 2/23～4/4

福沢一郎が 1950～ 80年代に制作した『スペイン闘牛』や『ギリシャ神話物語から』などのリトグラフ作品を紹介します。

【展示室 7】 染織 - 伝統の粋 - 1/16～2/21  
山種記念館

井上有一の書 2/23～4/4

“アートとしての書”として世界的に評価される井上有一の『東京大空襲』シリーズなどを展示します。



クロード・モネ《睡蓮》  
1914-17年  
群馬県企業局寄託作品



福田美蘭《道頓堀》2001年



井上有一《噫横川国民学校》1978年

シンポジウム

## 「佐賀町エキジビット・スペース 1983-2000

## 現代美術の定点観測」レポート

2020年10月18日〔日〕 14:00～16:00

会 場：群馬県立近代美術館講堂

パネラー：小池 一子（佐賀町アーカイブ主宰）

森村 泰昌（美術家）

田野倉康一（詩人）

## 概 要

パネラー紹介後、2000年にNHK『日曜美術館』アートシーンで放映された、クロージング・エキシビション「佐賀町2000」を鑑賞。続いて、小池一子から佐賀町エキジビット・スペースの成立と、それまでのファイン・アートに限らずデザイン、ファッション、演劇、建築と言ったノンジャンルの発表現場として、1980年代から2000年までのその活動と当時の日本における美術状況を独自の視点から解説。これに呼応する形で田野倉康一は、1993年にキュレーションを任された「00-Collaboration 詩と美術」の経験をふまえ、佐賀町エキジビット・スペースの実験性と当時受け手として見た佐賀町エキジビット・スペースについて語り、そして森村泰昌は、関西のアートシーンから見た佐賀町エキジビット・スペースの印象と小池一子という存在について触れていった。森村は、佐賀町での展示のため上京した東京での思い出と、東京の中でも川向こう的位置にある佐賀町の特質と関東と関西の食文化の違いを語りながら、その時初めて知った「けんちんうどん」を小池一子になぞらえ、佐賀町エキジビット・スペースに流れていた根本原理としての小池一子を「ヒューマニティ」という言葉で総括し、小池も賛意を示したが、その時ぽそつと言った「そのヒューマニティが佐賀町エキジビット・スペースをクローズセザるを得なかった」という小池の言葉が、最後にとても印象に残ったシンポジウムであった。



左：森村泰昌氏、右：田野倉康一氏



小池一子氏

会場風景



要申込／参加無料

美術館

作って、見て、冬の美術館でアートを楽しもう！

ヒントをたよりに作品を探したり、いろんな材料でオリジナルの作品を作ったり、美術館ならではのアート体験を、おとなも子どもも思いきり楽しんでください。参加したプログラムのスタンプを集めると、すてきなプレゼントがもらえます！

2021



「美術館アートまつり2020」の様子

2月14日(日) 10:00～12:00  
13:00～15:00

- ① ふわふわかわいいタオルペット♥  
色とりどりのハンドタオルで、自分だけのペットを作ってあそぼう！  
企画・実施：群馬県立女子大学 奥西ゼミ  
会場：1 階展示室
- ② 香る花  
紙で作った花に香りをつけて楽しみましょう！  
企画・講師：栃木美保（美術家）  
会場：1 階展示室
- ③ 展覧会ポスタープレゼント  
お気に入りのポスターを選んで、お持ち帰りください。  
会場：1 階展示室
- ④ 君は名探偵！  
ヒントをたよりに、展示室のなかで作品をさがしだそう！  
会場：2 階展示室

3月14日(日) 10:00～12:00  
13:00～15:00

- ⑤ おかしなスポンジケーキを作ろう  
カラフルなスポンジを使って、かわいいミニスイーツを作ろう！  
企画・実施：群馬県立女子大学 奥西ゼミ  
会場：1 階展示室
- ⑥ 小枝のくるくるスティック  
木の枝とすきな色の毛糸で作品を作ろう！  
ひもをつけてキーホルダーにもできます。  
会場：1 階展示室
- ⑦ プラ板×もようアート  
作品からとった形のなかに自由にもようを描いて、身につけるアートを作ろう！  
会場：1 階展示室
- ⑧ 耳をすまして  
作品のなかの音や言葉に耳をすましてみよう。  
何が聞こえてくるかな？  
会場：2 階展示室

### 参加申込みについて

参加には事前申込みが必要です。

各日とも午前、午後に分けて申込みを受け付けます（各回定員 100 名）。

[1] 2月14日 10:00～12:00

[2] 2月14日 13:00～15:00

[3] 3月14日 10:00～12:00

[4] 3月14日 13:00～15:00

※同じ日の午前、午後は完全入替制となり、重複して申込みすることはできません。

※両日とも参加希望の場合は、[1] [2] のいずれか1回と、[3] [4] のいずれか1回をお選びください。

### 【申込方法】

※2021年1月16日（土）9:30から先着順（受付開始前の申込みは無効となります。）

電話、Eメール、FAXのいずれかで、以下の内容をお知らせください。

- ①参加希望日と時間帯（[1]～[4]のいずれか）
- ②お名前（複数の場合は全員）
- ③年齢（複数の場合は全員）
- ④ご連絡先（電話番号／Eメールアドレス／FAX番号）

※電話の受付は、開館日の9:30～17:00となります（休館日：毎週月曜日）。  
※各回とも定員になり次第受付を終了します。

### 【申込み・問い合わせ先】

群馬県立近代美術館 教育普及係  
Tel：027-346-5560 Fax：027-346-4064  
E-mail：bijutsu@pref.gunma.lg.jp

※会場では、「新型コロナウイルス感染症に係る県主催イベント等実施ガイドライン」等に基づいた対策を実施します。

※新型コロナウイルスの感染状況などにより、内容を変更または中止する場合があります。最新の情報は当館HPでご確認ください。

P i c k u p

M u s e u m | N e w s

マリー・ローランサンの初期のトレードマークともいえるグレーがかったピンクとブルーの色調が特徴的な肖像画である。描かれた女性は伏し目で、わずかに口角を上げて微笑んでいる。内省的な、静かな肖像画である。舞台カーテンをキュビズム風に様式化した背景の曲線2本がかりうじて画面にリズムを与えている。よく見ると女性の左手と犬の体は未完成である。つまりこれは未完のまま依頼主に引き渡されなかった肖像画だろうか。本作品が制作された1914年、第一次世界大戦の勃発とともにローランサンはパリを離れスペインに亡命した。結婚したばかりの夫が敵国ドイツ人だったためである。それゆえ、これを苦難の時期の自画像と見ることもできるかもしれない。しかし本作品の習作と思われる小品の記録が残されており(参考図)、依頼された肖像画であったと考えるほうが自然であるように思われる。いずれにせよ、画家と交流があった詩人堀口大学が述べたように「彼女が描く女性はみな彼女に似ている」のだ。

ローランサン本人も、この肖像と同様、その実像はつかみどころがない。日本ではおなじみの画家だが、作品を読み解くために不可欠であるはずの彼女の素顔は、“詩人アポリネールの恋人”、“「洗濯船」のミューズ”などの今となっては時代錯誤な呼称の陰に隠されている。フランス本国では、ようやく2013年になって回顧展が開かれたが、いまだにキュビズムの周辺画家としての扱いである。一方、近年欧米で活況を呈する20世紀の女性芸術家についての研究では、彼女の社会的な立場や同性の恋人たちとの恋愛が作品に及ぼした影響などが論じられている。あと少しで時代がローランサンに追いつくのかもしれない。



マリー・ローランサン《ブルドッグを抱いた女》1914年 油彩・カンヴァス、92.0×73.0cm



参考図：マリー・ローランサン《若い女性の頭部》1913-14年頃 油彩・カルトン、38.5×30.0cm 個人蔵

## 次回展覧会案内

## デミタスカップの愉しみ

2021年4月17日[土]ー6月13日[日]

会場：展示室1

休館日：毎週月曜日(ただし5月3日は開館)、5月6日(木)

観覧料：一般 900(720)円、大高生 450(360)円

\* ( ) 内は20名以上の団体割引料金

\* 中学生以下、障害者手帳等をお持ちの方とその介護者1名は無料



左上より時計回りに  
錦光山《京薩摩金彩龍文カップ&ソーサー》  
(1800年代後期)

シャルル・アーレンフェルト《金彩花鳥文カップ&ソーサー》  
(1894-1930年代)

ビルケンハンマー《金彩花鳥文角形カップ&ソーサー》  
(1887-1918年)

マイセン《貼り付け花鳥とスノーボール蓋付きカップ&ソーサー》  
(1860-1880年)

すべて村上和美コレクション

16 ~17世紀に東洋から西洋にもたらされた喫茶の文化は、その後のテーブルウェアの成立やインテリア、装飾美術の発展に貢献しました。テーブルウェアと食文化の様式は19世紀に確立しますが、そのなかで異質な存在として現れたのが、単独でも使用されるデミタスカップ(Demitasse)でした。

本展は2000点以上のデミタスカップを所蔵する村上和美コレクションから精選した逸品約370点を紹介するものです。19世紀、中産階級が勃興した欧米にはコーヒー文化が浸透し、デミタスカップの多彩なデザインの舞台となります。続いて19世紀半ば以降、万国博覧会を契機に、ジャポニズムが流行し新しいデザインが生み出されます。日本で輸出用に生産されたカップ&ソーサーも人気を呼びました。さらに世紀末にはジャポニズムに影響を受けたアール・ヌーヴォー様式がデザイン界を席巻します。こうして精緻を極めた技巧が凝らされ、冒険的ともいえるデザインのデミタスカップが生み出されていきました。本展第1部では、欧州の名窯が生んだジャポニズム、アール・ヌーヴォー、アール・デコのデミタスカップ、そして日本製のデミタスカップなどを時代順に並べ、第2部では、形状や装飾の違いに焦点を当てます。小さなデミタスカップならではの凝縮された技術の美、大胆な意匠などをお楽しみください。

